

庄川上流限界地域における

過疎山村の動向

山口 源 吾

目 次

1. はしがき
2. 白川村の概観
3. 限界地域の過疎と廃村
 - a. 牛首廃村
 - b. 崩壊寸前の大窪, 馬狩
 - c. 廃村飛驒加須良と越中柱
4. 過疎集落六廐
5. む す び

1. はしがき

最近わが国の山村では、人口流出によって今までの生活水準を維持することが困難となり、過疎化から終には廃村に至ったものがある。

過疎化とは急激な人口流出の結果集落の戸口が激減し、出生率の低下から死亡率が出生率を上回り、自然増加率を低下させるような人口構造になった状態と、生産年齢人口が減少したため労働力が不足して生産活動が低下して、資源利用が粗放化ないしは停止した状況と、地域社会の機能が麻痺して終には集落の共同生活の維持が困難になった状態の、人口・経済・社会の三面のマイナス状態を意味する。

庄川上流の居住限界地域には1960年代に過疎化現象がおこり、挙家離村からいくつかの廃村が生じている。廃村に至る事情はいろいろであるが、最も主要な原因は最近の高度な経済成長に伴って限界地域の社会環境が変化し、自然村の住民

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

が旧来の伝統的生活様式ではその変化に対応できなくなった為と思われる。

居住限界地域の自然環境は電源開発のためのダム建設や、奥地林開発のための林道敷設或は観光資本の進出などのためしばしば改変されている。こうした人工自然に対する地域の再開発の仕方は、地域住民の土地条件に対する価値判断によって一様ではなく、再開発に積極的なものと消極的なものがある。

こうした経済変動や自然環境の改変がしばしば過疎化の原因となるが、それは単純な相関関係にあるものではなく複雑である。以下岐阜県白川村と庄川村の限界地域山村の動向を記述する。

2. 白川村の概観

飛驒山脈の西部でこれと並行する赤谷山脈と西白山地の間を、ほぼこれに並行して南北性の谷を作るものが庄川である。庄川はこれ等山地の間を穿入蛇行しつつ所々に堆積作用を行って小盆地群を造っている。新淵・牧戸・萩町・鳩ガ谷などの諸盆地がこれである。鳩ガ谷と対岸戸ヶ野の間には1～2段の段丘が見られ、鳩ガ谷側では比高10m、戸ヶ野側では2段で40m位の段丘崖があり、庄川の新しい侵食作用を物語っている。

また硬い飛驒片麻岩や花崗岩・流紋岩・^{フンガン}玢岩などを截って流れる庄川は、諸小盆地の間に^{ぼけ}歩危と呼ばれる絶壁にはさまれた峡谷を造り、それが上・下流地域の交通上の大障害をなしていた。平瀬歩危や椿原赤尾間の歩危はそれである。

こうした渓谷にある白川村は、東西14km、南北38kmという細長い村で、総面積358.45km²、人口2,776人(1969)、23部落をもって構成されている。人口密度が77.3人で全国平均の3分の1にも満たないのは、総面積の95%が山林によって占められ、住民の約40%が農民であって第二・三次産業に比べて労働生産性の低い産業に従事する者が多いこと、大牧及び御母衣ダム建設によって大牧・野谷・尾神・福島・秋町などの諸部落が水没離村したからである。

住民の生産基盤は総面積の54%を占める国有林を除いた土地で、民有林14,866haと水田146ha、畑34haから構成される。民有林は深雪地域であることと、山

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

崩のため開発利用が進まないが、年産10,520kgの米はその54%を政府に売渡すことによって農産物中最も大きな収入源となっている。伝統産業の養蚕は衰微して年収繭量7,500kg、僅かに延57戸に飼育されているに過ぎない。最近和牛の多頭飼育が奨励されてはいるが飼育戸数104、出荷頭数も年100頭足らずではその売上高1,300万円も供出の米価には遠く及ばない。(1968)

庄川右岸の平瀬鉱山(住友金属鉱山)は明治末年(1911)に発見され、現在もモリブデン鉱床としては良質で採掘されている。年産約300t、会社の収益は24,000万円を越すが、鉱山の規模が小さく従業員も75人で地域に対する反対給付と雇傭市場としての価値は少ない。(1969)

白川郷の南端荘川村と白川の北端では集落の標高が400mも異なるので、春の訪れには約3週間の差がある。桜の満開日は萩町(標高500m)では4月20日、平瀬(650m)では4月27日、荘川村新淵(800m)では5月9日、黒谷(880m)では5月10日である。この谷の年平均気温は11.5°C(萩町498m地点)で最低気温は-12.2°C、最高気温は28.8°Cである。雨量のピークは夏と冬にあり、年雨量は2,600mmである。

住民の生活に最も支障を与えるものは冬季4月間の積雪である。12月すでに90cm余の積雪があり、深雪期の2月には盆地で170cmに達する。このため白川村の北端椿原ダムから富山県西赤尾に至る歩危の交通は杜絶し、住民は危険を犯して関西電力会社のダム連絡船に便乗、村南部諸部落の連絡にあてるといふ実状である。

白山の東麓、大白川の上流には大白川温泉があり、pH 6.4の硫化水素泉で51°Cの熱泉を自噴していた。同じ谷の地獄谷では標高1,400mの地点に御母衣第二発電工事中、水温92°C、pH 2.2という硫化水素泉を発見したが、まだ未開発であり、将来は下流の平瀬に引湯して国民休暇村を造る予定である。

戦前白川郷と他地域との交渉はまことに不便であって、この地域は地形的に隔絶地域・文化的に封鎖地域とされていた。

1926年南流する宮川と北流する庄川との分水界を越えて、白鳥町からこの村に

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

至る白川街道が改修され、馬車の往来ができるようになった。その頃村の南の中心集落平瀬には商店や旅館・料理屋が開業した。村の往還（現国道156号線）を大型車が走るようになったのは、1945年軍用道路として北方五箇山方面からの道が改修されてからのことである。

1955年国鉄バスが金沢まで通じた。次いで翌年天生峠越の濃飛バスが高山に通じ更に1958年156号線に岐阜・高岡間のバスが通ずるようになって、初めてこの谷は外界との交渉の自由を得た。

過疎化が著しく廃村現象の見られるのは庄川の小盆地群ではなく、支谷の小盆地や段丘上の小村で、特に中心集落に遠い土地生産性の低い地区である。

3. 限界地域の過疎と廃村

庄川本流の諸盆地から離れた支谷の小村では深雪による冬季3ヵ月余の日常生活の不便さと、地方都市への到達度に恵まれないことから、また現地では急激な近代化に対応することができないことから、人口の流出、過疎化さらに進んでは廃村化という現象が起っている。その代表的な自然村は荘川村六厩・白川村大窪馬狩の過疎集落と、白川村の牛首・加須良と富山県境川沿いの桂の諸廃村である。

以下それ等諸集落の実態を述べよう。

第1表 白川村の過疎部落の人口推移

自然村	明2	〃5	〃40	昭12	〃17	〃30	〃40	〃45
大 窪	2戸	2	3	3	3	3	3	3
	10人	17	27	28	27	22	15	7
馬 狩	8戸	8	8	8	9	9	9	7
	60人	73	86	81	72	67	48	25
加 須 良	6戸	8	8	8	7	8	9	0
	80人	91	77	78	68	61	37	0
牛 首	5戸	8	7	11	10	14	0	0
	40人	54	63	76	86	76	0	0

白川村史全による。S45は8月実態調査

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

a. 牛首 廃 村

大牧ダムの北方荻町と鳩ガ谷の間で北東から南西流して庄川に注ぐ短小な河川が牛首川である。その合流点から比高約 40m の戸ヶ野段丘に登り牛首断層谷を約 4 km 遡ると牛首に達する。標高 750m。

牛首は踏分道を僅に改修した歩道に荷車が通ずるだけで、1950年代に林道が開通するまでは自動車も入らない僻村であった。

集落の開発立地の年代は不明であるが、草分けは 3 戸であると伝えられている。斐太後風土記によれば「戸数 5 戸人口 40 余人、焼畑 3 町 6 反、外 7 町 2 反、山林段別木数未詳」とあり、もとは焼畑専門の村であった。集落の南と北には前輪廻の平坦面があって、そこは熟畑として利用されていたが、それ以外の急斜地では春焼した後、土用切り或は秋切りして雑穀が作られていた。

焼畑の盛であった当時はひえ・あわ・そばが常食で山菜も採集されていた。

耕地の総面積は田 2 町 8 畝、畑 1 町 2 反 2 畝で、14 戸の農家は一戸当り僅に 2 反 3 畝という零細農家であった。民有林 828ha は登記面では 16 人の所有地で薪炭林が多く、農家の過剰労力は製炭業に向けられていた。製炭用原木の不足分は営林署から国有林の払下げを受け全戸これに従事した。林地は飛驒片麻岩の岩山が多く泥土が少ないので窯の位置選定に苦労した。

川沿の水田は戦前試験的に開田されたもので反収 6 俵を得た。「からんせ」と呼ばれるシーソー装置の原始的水車が川水で動かされ、各戸の脱穀精粉に使われていた。

村人の娯楽施設は皆無であった。氏神は荻町の八幡社で 10 月の秋祭りには 1 戸 1 人の人足を出して飾物や祭祀の手伝いをし、15 日の仕舞や踊りには全村民が参加し帰村は夜中の 1～2 時に及んだ。また全戸が荻町明善寺の壇家であったので、寺僧の 2 月から 3 月へかけての年始廻りには各戸が日を決めて歓待し、この時の村は活気づいた。こうした催は部落民の重要な精神的紐帯であって、これが住民の共同体意識を養っていて後の村内移住の意志決定に重要な素因ともなっている。住民の地縁意識は自家発電によっても養われていた。1960 年ランプ生

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

活から電燈生活に入ったのであるが、部落の発電管理は各戸が当番に当り、落葉の候には貯水槽にたまる落葉で水量が減らぬ様注意しなければならなかった。

学童のためには冬季分校があり、積雪期の通学の不便を補っていた。林道が開発され車の便が得られるようになり、更に自家発電が関西電力からの配電に代り、1962年には各戸に有線放送電話が敷設されて生活水準が改善されながら、1966年最後の1戸の離村によって完全廃村となったのは何故であろうか。

12月から4月に及ぶ深雪期には、最大2.5mにも及ぶ積雪があり、冬季約10日間は荻町との交通が杜絶する。この時期には急病人に対する手立もない。その上屋上1.8mの雪下しには連年多大の労力を空費する。

集落が牛首川の両岸に立地するので、兩岸の往来には数本の木橋が必要であった。雨季にはしばしば土砂と切株が押出して牛首川の流路を変え、橋を流失させた。災害土木工事の架橋は村人の負担となり、多くの失費をもたらした。

都市と低暖地の住民が経済の高度成長で、生活水準の向上を謳歌している頃、牛首では急激な変動に対応できなくなった四戸がまず挙家離村した。人口流出が始まると分教場は鳩ガ谷に統合され、児童は6kmの道を時には2時間を要して通学しなければならなくなった。こうした生活の不便さの上に、伝統的な農林依存の生活と日稼労働による収入とでは、都市との所得格差が益々大きくなり、自己の労働力を価値判断するようになった住民には、牛首での生活は耐えられないものとなった。

第2表 担 税 能 力 (S35)

	村 民 税			固 定 資 産 税		
	総 額	納税者	平均額	総 額	納税者	平均額
白 川 村	4,285,610	1,800	2,381	26,559,380	621	—
牛 首	19,000	19	1,000	6,300	9	700

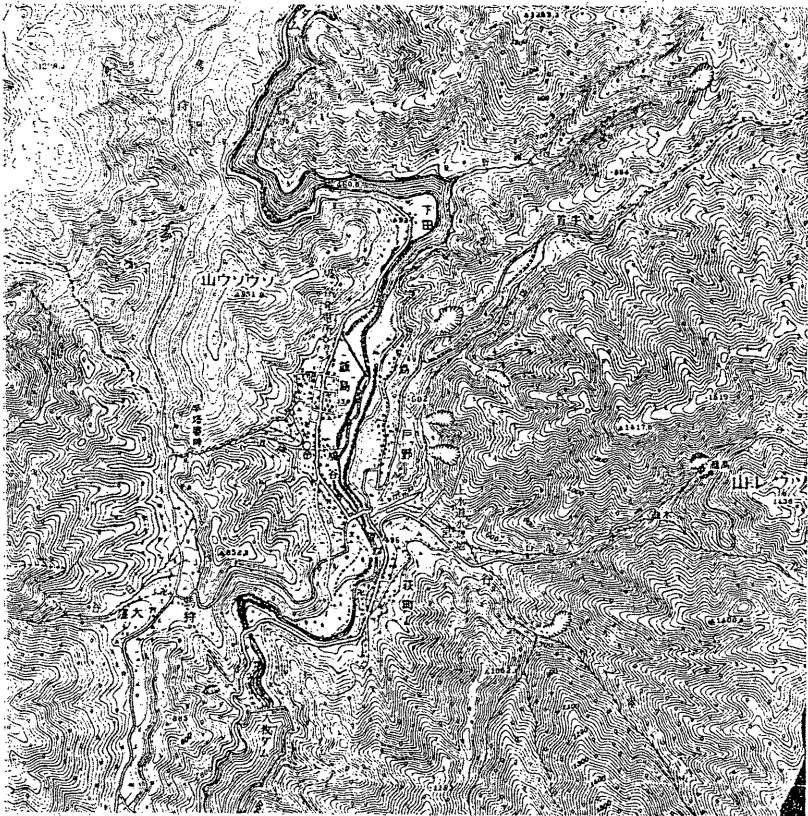
村役場資料

いま富と所得を表わす一指標として担税能力を示せば、その低額なことに驚かさされる。1960年の牛首の村民税納入者19人の平均は約1,000円で、村平均の

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

$\frac{1}{2}$ 以下，固定資産税納入者9人の平均は僅に700円に過ぎない。これは関西電力等，発電関係の多額納税者があるから平均値での比較は意味がなく，他部落との比較においてである。

初めの離村者は自発的離村であったので移転補償はなかった。12戸の部落では人口流出によって冬の除雪道作りが不能となり，急病人の搬出にも人手が不足した。部落の集団生活機能は崩壊し過疎化は深刻となった。村当局は移転補償費一戸30万円を拠出し村内移住を奨励した。残存者はこれに応じて挙家離村，1966年ついに完全廃村となったのである。



対称地域の一部 白川村牛首・大窪・馬狩

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

ちなみにその移住先をみると、村内では荻町6、鳩ガ谷1、村外では岐阜・美濃太田・高山・井波などで、殆んどが第二・三次産業に従事している。

伝統的な合掌造りの民屋は放棄されうち4戸は倒壊し、いまその跡は雑草地と化している。区有林は十條製紙・マルシン製材等に分割売却されたが、私有林は残存しその管理には年一度帰村する者や他に依託しているものもある。また旧耕地には杉が植林されいまは人工林と化している。

b. 崩壊寸前の大窪と馬狩

庄川の左岸で荻町の西部の段丘を上り、825.3mの三角点の南を迂廻する林道を進み馬狩トンネルをくぐると馬狩の集落に出る。荻町からここまでの時間距離は1時間半で、大窪は馬狩から西へ数分の距離にある。この道はいま建設中の白山スーパー林道の一部で、将来は白川村と金沢を結ぶ奥地開発林道である。また中心集落鳩ガ谷の村役場から横道谷の山道を西行すれば約1.5kmで卒塔婆峠(680m)の谷中分水界に達し、眼下には本流庄川に並行して北流する馬狩川が見られる。馬狩川は庄司岳に発し、ゾウゾウ山の西に満壮年期の谷を造り内ヶ戸を貫いて庄川に合流する。馬狩川の谷は断層谷で、谷の南に小盆地があり、盆地床は北に傾く扇状地状の地形でそこに大窪・馬狩の二集落があり、集落はその上限において735mに達する。

他集落との連絡は徒歩が唯一の交通手段であったが、現在奥地開発林道が建設中で車が通ずるが鳩ガ谷までの車代390円は住民にとっては大きな支出である。そのため町への通勤にはオートバイや自家用車が必要である。

大窪の草分けは大杉と大家の二氏で、長く2～3戸で一村を構成していた。斐太後風土記によれば「大窪は家数2戸、人口20余人、焼畑1町歩、外2町歩、山林反別不詳」とあり、稗・大麦・大豆・小豆の雑穀のほか桑・麻・たばこなどの栽培が行われていた。

「馬狩は戸数8戸、人口60余人、焼畑1町歩、外2町歩」で、雑穀栽培のほか葛粉の特産があった。

その後二集落の戸数には殆んど変化がなく、喧伝される白川郷の大家族制もこ

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

ここではあまり顕著でなかったようである。しかし大杉氏では大正初期20人の家族を擁し、「或年の正月18人で淋しい年をとった」等の話が伝えられるところをみれば、一部にはそうした大家族制も見られたようである。

二集落の土地利用は下表の通りで、白川村史全記載の元禄水帳によれば、大窪には田2反8畝、畑5反8畝9歩、屋舗4畝15歩のほか焼畑1反7畝24歩、草野2反歩があり、馬狩には田9反3畝13歩、畑2町4反3畝26歩、屋舗7畝10歩のほか焼畑に関する記載はない。しかし聴取りによれば共に江戸期以来焼畑耕作は行われていたとゆう。盆地床に近い里山は部落有林で、部落有林内での焼畑に関しては先取特権が認められていた。土壌の深い日向斜面では7年連続植付が可能なところがあり、熟畑に近い収穫をあげた。作物はあわ・ひえ・大豆・小豆・そば・え・等で自家用主食であった。

第3表 大窪・馬狩の土地利用

自然村 年度 地類	大 窪		馬 狩	
	昭 36	44	昭 36	44
田	町反畝 1.8.2	ha 1.7	町反畝 6.2.3	ha 5.1
畑	5.2.10	0.18	1.4.0	1.7
草地	—	1.0	—	5.6
民有林	—	198.0	—	223.0

嘉永・元禄頃の水田は専ら稗田であったが、米に対する欲求から次第に米田となり、昭和初年から水田面積は急激に拡大した。品種は戦前は豊年早生であったが最近^{よねしろ}は富士実りや米代に代っている。戦前の田植は

6月20日頃が最盛期であったが、今は農業技術の改良で5月末となり、収穫期も9月20日から30日までと1ヵ月近く早くなっている。この地域の雪融けは遅く時には5月上旬まだ田畑に雪を見るので、水田の雪消しには土や灰を散布した流水によることもあった。米の反収は4〜8俵と年によって差があり戦後一時は30〜50俵を供出する農家があったが、現在では殆んどが飯米農家となっている。

生糸が日本の輸出品の第一位を占めていた頃は養蚕の最盛期で、各戸合掌造りの3階にまで蚕棚をこしらえ、手伝い人夫まで雇入れて年80貫の収穫をする農家さえあった。しかし養蚕技術は伝統的で合理性を欠き、病蚕が多く出て失敗の年

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

もあった。山桑の発芽が庄川筋よりも約1ヵ月も遅いので春蚕飼育は行われず、夏蚕は荻町左岸の河岸段丘の桑園中で共同稚蚕飼育したものを三眠起から個人飼育し、8月15日に上簇。秋蚕・晩秋蚕も同様にしてそれぞれ8月29日と9月16日に上簇する。しかし晩秋蚕は蚕の上簇期と山草刈りが競合するので掃立量は少なかった。一戸平均の収繭量は約30kg前後で、こうした状態が1955年頃まで続いたが最近では極端に衰微している。

畑地培培の雑穀と蔬菜は自家用だけで、出荷するまでには至っていない。これは培培技術が幼稚で市場向けの品質統一が困難なことで、消費市場に遠いという不利な到達度のためである。

住民は蛋白質源の自給を大豆のほか川魚に求めた。ます・いわな・かじかは重要な蛋白質源であったが、各所にダムが建設されると釣量は減じた。盆正月の塩ますやにしん・さば等は城端方面の越中ほかによって移入されたが、現在はトラック輸送に変っている。

この地域の住民は、11月下旬の根雪の降るまでに越冬物資を買い込まなければならぬ。自動車が11月下旬から4月中旬まで使用不能となるからである。

大窪・馬狩には「稼いだものはきつい。」という俚諺がある。その意味は稼いで財をなした者は無いということで、この集落の土地生産性の低さを現わすものと思われる。富の程度は担税能力でよく表われるから、次に村平均の村民税・固定資産税と二集落のそれとを比較することにする。大窪・馬狩の納税者一人当りの村民税の平均は3,300円と2,700円で村平均4,241円の約2/3であり、固定資

第4表 担 税 能 力 (S44)

	村 民 税			固 定 資 産 税		
	総 額	納税者	平均額	総 額	納税者	平均額
白 川 村	3,456,210	815	4,241	166,324,000	693	—
大 窪	9,900	3	3,300	18,000	5	3,600
馬 狩	27,000	10	2,700	39,000	15	2,600

(村役場資料)

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

産税は大窪で総額 18,000 円，馬狩で 39,000 円で村総額の 0.3% に当る。即ちこの数字によってこの 2 集落がおかれた白川村での経済的地位を示すことができる。

2 集落は中心集落から離れているために幾つかの後進性を持っていた。1950 年まではランプ生活で，モリブデン平瀬鉱山用に平瀬発電所が開設されて初めて電気の恩恵に浴した。

第5表 大窪・馬狩の世帯構成 (1970.8.28)

	祖父	祖母	父	母	息子	娘	備考
(大窪)	①	●	●				父母子供 6 人離村 子供 1 人中学校入寮◎ 挙家離村祖父も近く離村予定
	②			●	●	●◎	
	③	●					
(馬狩)	①		●	●	●	●◎	小1, ◎中1, ◎高校 1 人 φ 入寮村外居住 父母離村
	②	●	●			●◎	
	③	●	●			●	老人以外挙家離村 長子以外の子供は就職離村
	④			●	●	●	
	⑤		●	●	●	●	挙家離村父のみ夏帰村 子供は中学校入寮 子供 2 人進学村外居住
	⑥			●			
	⑦			●	●	◎	
	⑧			●	●	φ	

聴取り調査による

また積雪期に備えての冬季分校は1939年馬狩の信称寺に間借して開校されたが，4 年生以下の通年分校が開設されたのは1952年のことである。新聞は 1 日遅れのものが届き，郵便物は冬季は不定期配達となる。

伝統的な農業生産に生活の基礎を置き，生活水準を向上させようとしても所得を増すことのできない住民は，都市に向かって流出しはじめた。それは1960年代に急激な人口減少となって現れ，そしてそれが過疎化を導いたのである。例えば部落の構造改善事業計画（開田事業を主としたもの）は12戸うち3戸の農家の挙家離村によって実行困難となり実現できずに終り，耕地の拡大どころか耕作放棄の田畑さえ現れた。水田の転換作物としての野菜は買手市場が無くただ田地に放置されている。米穀生産調整のための休耕報償金制度はこ二集落の崩壊に拍車をか

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

けた。低生産性の水田を放棄して出稼すれば労働賃金の上に報償金に加わりより所得は増加するからである。人口特に生産年齢人口の流出は急激に行われ第1表に示す通りここ5年間に在村人口は半減した。ここ10年人口の自然増加は零、2集落の総人口25人のうち56%は50才以上の高齢層によって占められ、全く老人の村と化してしまった。戦後10余人を数えた学童も現在は唯一人となり、分校経営に大支障をきたしている。中学・高校新卒者は一人も在村せず、40才以下の女子は学童唯一人で、農家の嫁不足は常態化し、集落の冬季の家屋・道路保全のための労働力は極度に不足を来たしている。

馬狩では8戸中現に3戸が離村準備中であり、大窪の3戸も2戸は既に祖父母以外は離村している。こうして村落共同体の生活組織は破壊され2集落は崩壊寸前にある。(1970)

第6表 大窪・馬狩の年齢人口構成 (1970.8)

年 齡 性 別	0	10	16	21	31	41	51	61	71	計
	9	15	20	30	40	50	60	70	80	
男	0	2	0	4	1	0	4	2	2	15
女	0	1	0	0	0	3	2	0	4	10
計	0	3	0	4	1	3	6	2	6	25

聴取り調査による

c. 廃村飛驒加須良と越中桂

庄川の左岸には飛驒と越中の国境をはさんで、その南側に加須良川北側に境川の二支谷がある。共に峻険な峡谷をなしているがその中流に各1つずつの堆積盆地がある。

白川村の北端の椿原・赤尾間の歩危の中間の国道156号線加須良口でバスを下り、断崖の林道を約4km西行すると加須良川は急に流路を南北に変え、そこに狭小な盆地が現れる。

加須良盆地は南北に1.5km、東西0.3kmの小盆地で、盆地床には8戸の小村があった。加須良から西に比高約60mの地蔵様の峠を越えると境川に出られ、

庄川上流限界地域における過疎山村の動向



廃村加須良と桂

対岸に桂部落が見られる。桂盆地は加須良よりも小さく長径1 km 短径0.2kmで、盆地床にはチャート・砂岩・花崗岩・片麻岩などの硬い砂礫が堆積していて、土壌は薄い。

加須良と桂は同意語で野草かずらの転化したものだと言われている。共に古い

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

集落のようで、「古くから早霜深雪にて穀物実らず，葛藤にて布を織り，山蔬をのみ用いて世を過す山家」などと言われた所である。

加須良と桂は峠を越えれば約30分の距離にあり，昔から一つの生活共同集団を構成していた。

集落の発生は一向一撥の落人集落であるように言われているが，（村民佐々木氏談）僻遠な隔絶性地域であるので長く司法権も及ばず（山本久一郎区長所蔵の古文書によれば）政治犯の隠遁地でもあった様である。

加須良の草分けは3戸であったが，明治初年には8戸に増加し，それが現在まで殆んど変化なく続いていた。狭い土地で当時の生産形態ではそれ以上増大の余地は無かったからである。桂も同様で一村6戸が長く続いていた。

元禄水帳（飛騨国大野郡白川郷尾神村田畑屋舗御検地水帳）によれば，加須良には田6反2畝10歩，畑1町6畝15歩，屋舗5畝21歩があり，水田の稗と畑地の雑穀で自給的な生活をしていただと思われる。廃村直前の耕地面積は水田3町8反6畝5歩，畑2町3反1畝2歩で1戸平均5反5畝15歩の耕地を持っていたことになり，安定農家とはなり得なかった。それを補うものとしての民有林は，1,421haで1戸平均200ha，開発林道が無かった当時は利用価値が少く，製炭用原木として役立つだけであった。

桂の6戸も5反百姓で，飯米は4月には無くなり赤木から移入した。近年新農村建設計画によって機械開墾が行われ，盆地床の水田は1戸当1haとなり，省力農業で米穀が自給できるようになった。厩肥を得るために各戸1頭の牛が飼われ厩肥の量を競ったものである。また野良着用の麻は1955年頃までは培植されたが，今は見られない。

山桑利用の養蚕は国用生糸用の繭を得るため，富山の仲買商人の手に渡された。しかし最近では衰微し唯1戸がこれを行うのみとなっていた。

惣山とよばれる部落有林は，地権設定当時から6戸の連名で登記されていて，人々はここから薪炭を得ていた。青壮年層は農繁期以外は国有林の雇傭労働者となったり，製炭に従事したりしていたが，耕地に恵まれなかったので長男以外は

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

殆んど村外に出稼移出した。

加須良・桂の習俗は白川本村とは異っていた。例えば祇園会は部落の休日であったが本村では休まなかった。本家と分家との間では格式が守られていたし、入浴の時に神仏に礼拝合掌する習俗が残存していた。

本村との対抗意識も強かった。それは小村のため地区代表的な村会議員を選出するにも得票数が足りず、部落民の生活改善要求の発言権もなかったからである。例えば区有林売却の際、村と部落の山林境界確認のために村役場保存の絵地図を見ようとしたが、その機会さえ与えられなかった程である。

次に2集落の婚姻圏を見ると、最も多いのが部落内婚で次が村内婚であったが、戦後は都市に長期出稼する者が増えたので、外部都市との通婚が増している。

この2部落は前記大窪、馬狩よりも更に到達度に恵まれない地区である。国道往還156号線にでるまでに加須良は1時間半、桂は2時間半を要する。国鉄バスの開通以前は生活物資の移入は城端方面のぼっかによる担夫交通に頼り、住民は上平村赤木で買入れた米や酒を背負って部落に帰った。近年林道の開かれるまでは、境川や加須良川沿の部落への道は全くの踏分道で懸崖を伝い何度か谷川を渡渉するという峻しきであって、雨天には落石の危険さえあった。部落民が区有林を売却して得た金で地元分担金（経費の50%）を支払って加須良林道を竣工させたのは1962年である。こうして漸くトラックが通うようになってから用材の伐採が進捗し山林の価値は増大した。しかしここでも冬季の積雪3mは大きな生活上の支障条件となっていた。

多忙な秋の収穫期には越冬物資の貯蔵もせねばならない。冬の娯楽の少い地域なので越冬には各戸酒3～4斗の外醬油・干物・塩物を購入し、大根・人蔘や山菜を200貫を潰込まねばならなかった。冬期の燃料としては春山の薪を10日間背板で里に運び、雪囲いのすだれも山の萱で編まねばならない。味噌の仕込み、貯蔵用の山菜乾燥、雪靴・かんじきの補修等多忙を極めた。

この2集落はいわゆる僻地で無医地区であるほか長くランプ生活が続いていた。1963年共同出資で自家発電をはじめたが点燈は夜間のみで、昼間ラジオは聞けな

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

かった。僻地校桂分校では専任教員が得られず授業を欠く月があったし、1949年まで加須良の冬季分校では、本分校各一週間ずつの巡廻授業が行われていた。また中学生は冬季は通学が困難なため、寮に入るか下宿せねばならない。これは地域住民にとっては多大の出費であって、教育の機会均等には程遠かった。中学・高校進学で数年間部落を離れた生活は青年に母村定住の意志を失わせ、卒業後は就職の機会の多い都市に吸引されて部落の人口減少を促した。

積雪による雪害も地域住民の流出を促した。屋根の雪下し作業は1冬4回は必要で、それを怠ったため北陸大豪雪の年倒壊した家もある。冬期の郵便物配達是不定期となり、桂では赤尾まで受取りに行かねばならない。

マスコミによって環境に対する価値判断力が養われた。所得の地域較差から壮年層も流出し始めた。そして終には挙家離村が始まった。

最初の挙家離村は加須良である。林道が開けると山林資本家が進入した。林道開発の負担金支払のために売却された区有林はたちまち伐採され無立木地と化した。無立木地の増加が水害の危険をもたらすと考えた人々が、まず不利な環境から離脱した。離村者があると残留者の結や部落の出払いの負担が増す。その負担に耐えられない人々は次々と家屋・耕地を放棄して離村した。こうして加須良では林道が完成して家財の運搬が自由になると一時に全戸離村し、1967年秋には完全廃村となったのである。いまここは無人の里となり耕地は放棄されて雑草の生い茂るままとなり、倒壊家屋1、放棄された廃屋2を認めるだけとなっている。

離村者の移住先は分散的で富山市3、春日井市3、岐阜市1、金沢市1となっている。これは前述の牛首と異るところで、住民の意識統一ができなかった為であり、牛首の村内移住に対して加須良では完全に近隣大都市移住である。

更に移住先での職業を見ると、風呂屋3、アパート・旅館・パーマ屋・板金業・会社員各1で一般に安定している。安定の理由は富裕離村という他に例の少い形で行われたからである。広大な区有林売却は山林大資本王子製紙・中越パルプに対してなされ、各戸に対する分配金は3,000万円を越えたものと推察されてい

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

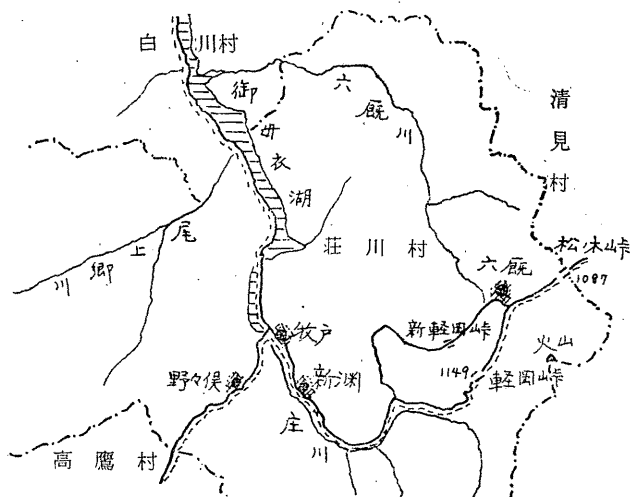
る。

打撃を受けたのは桂である。元来加須良とは峠越に僅か 20~30 分の到達度で一つの集団社会を造っていた。両部落同志で結も行われていたし、道路・橋の手入れ・掃草も分担していた。加須良が崩壊すると桂の挙家離村が始り、加須良の完全廃村化の翌年1968年には桂で越冬する者は僅に2戸となり、他は部落外に疎開した。その後残存した2戸は集落の管理に悩んでいる。特に学校・神社・橋等の除雪は過重労働である。飯米を得るための水田以外は放棄され、畑作は粗放化し雑草地が増している。学童2人の分校も近く廃校となる。そして1970年11月最後の2戸人口5人が富山平野に下れば完全廃村となる。

ちなみにその移住先を見れば富山・金沢・大阪・東赤尾・城端と各1戸ずつで、他の1戸は未定である。

4. 過疎集落^{むかい}六厩

国道158号線を西に高山市から清見町管内の老年期の開いた谷を通り、松ノ木



六厩の位置

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

峠(1,087 m) の波浪状の山地を越えると庄川上流最奥の庄川村に至る。庄川村では御母衣ダム建設のため6部落220戸、1,800人が立ち退き、耕地150haが水没して、人口と経済力の過半を失った。林業労働者の多い村であるがここでも現在過疎化現象が起っている。次にこの村で最も過疎化の著しい六厩について記述する。

六厩（前頁図参照）は御母衣湖に注ぐ六厩川の頭部の浅く広く開いた谷底の小村で、庄川村の中心集落新淵までは軽岡峠越に14kmある。松ノ木・新軽岡峠の2つの低い峠の間には六厩の集落が唯一つあるだけで、全く隔絶的な位置にある。庄川村は御母衣ダム建設のためその上流に孤立残存する地域となったが、六厩は特にその色彩が濃厚である。

六厩はもと高山の商圏に属していたが、伊勢湾台風で国道158号線が破壊され生活物資の輸送が杜絶えた時から、物資は村の南部郡上郡白鳥方面から移入されるようになり、新軽岡峠開通後もその動態は続いている。

集落の標高は約1,000mで、その上限は1,020mである。住民の生業はその土地所有でも明かな通り農林業が主で、それに最近僅に牧牛が加っている。

斐太後風土記によれば、戸数18、人口90余人で焼畑9町3反4畝、外18町6反8畝とあり山林反別は不詳であった。雑穀の外麻・繭なども産したが水田耕作は行わなかったようである。現在は畑地よりも水田が卓越するが林業労働者が多く農村よりも林業村の色彩が濃厚である。

第7表 六厩の土地利用（1,970 センサス）

水田	畑	宅地	山林	原野	その他
880.75 a	482.87 a	151.90 a	18,355.07 a	1,101.87 a	3,547.41 a

S.40年センサスによれば15才以上の産業別人口は農林兼業者75人、商業2人、サービス業3人、建設製造業7人、運輸通信業7人となっており、生産年齢層の81.5%がいわゆる農民で、伝統的な農業と村有林の伐採・造林と出稼に生活の基礎をおいているが、地元民による製材業は労働力の不足から現在中止しているし、村当局の奨励する高冷地蔬菜栽培も未だ行われていない。

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

住民の所得水準は村内他部落よりも低位にある。いま所得水準を示す指標として担税能力を見ると、村民税に於て庄川村平均の80.5%、固定資産税は平均の44%でしかなく、僻地高冷村の富の程度をよく示している。

第8表 担 税 能 力 (S45)

	村 民 税		固 定 資 産 税	
	総 額	納税者数	総 額	納税者数
庄川村	3,973,750 円	605 人	3,129,070 円	620 人
六 厩	253,720	48	103,230	46

六厩の急激な人口流出はわが国の高度経済成長に伴う向都現象で、その流出先の主な都市は高山市であるが隣接の清見町に移住する者もある。いま最近の人口減少を見ると、昭和35年から40年に至る5年間に27.33%、即ち年平均5.47%減となり、45年までの10年間には実に40%余の人口減少率を示している。

第9表 六厩の最近の人口と戸数

	S35	40	45
戸 数	52	45	42
人 口	273	199	163

以上の傾向はこの集落に近い将来廃

村へと追い込まれる可能性を示すもの

であるが、こうした過疎化に対する村

当局の対策は無く、本村中学校新卒者

の90%は名古屋、岐阜、高山に流出し、冬期積雪期は通学困難で本校に寄宿生活を余儀無くされる六厩では新卒者で在村するものは皆無である。

唯現在(1970)名古屋の不動産業者による土地購入が見られ、集落の東方大野平には別荘分譲地の開発が始まっている。しかし到達度に問題があり、ブルドーザーによる冬期の道路除雪は可能であっても、別荘の冬期管理は困難である。地域の再開発は高原蔬菜園芸か観光休養集落の建設かそれとも林地の利用に新しい方途を見出すか。土地条件の再吟味と投下資本の導入についての考察が必要である。

5. む す び

庄川上流の限界地域では多くの自然村が過疎化し、特にその縁辺集落はその低い生産性と不利な到達度の上に、冬期の深い積雪による生活難渋のため、牛首・

庄川上流限界地域における過疎山村の動向

桂・加須良の如く廃村となったものがある。また大窪や馬狩の如く高齢人口が集落の1/3を占め崩壊寸前のものがあり、庄川村の六厩の如く急激な人口減少に悩むものもある。

山村の再開発には山地住民の旧来の伝統産業に対する改新意欲と、土地条件に対する科学的合理的な再吟味とそれから生れた対応方法と、行政機関の政治的フアクターが良好なことと、以上に経済的投資が積み重ねられることが必要である。